

アガサ・クリスティの田園

——アガサ・クリスティ作品から読み解く20世紀イギリスの 田園の変遷（2）1940年代から1950年代まで

坂 田 薫 子

序

パズルにも似た、娯楽としての謎解きが目的とされるアガサ・クリスティ（Agatha Christie）のミステリー小説は、人物描写が平板で、内容に深みがないという批評を受けることはあっても、いわゆる純文学に分類されることはなく、英文学史の正典として扱われることもないため、研究対象として論文に取り上げられることはまれである。しかし、処女出版作品の『スタイルズ荘の怪事件』（*The Mysterious Affair at Styles*、1921年）から、第二次世界大戦中に書き上げ、金庫に保存してあった『カーテン』（*Curtain*、1975年）と『スリーピング・マードー』（*Sleeping Murder*、1976年）を除き、いわゆる「最後」の作品となる『運命の裏木戸』（*Postern of Fate*、1973年）まで、50年以上にわたって執筆活動が続けた彼女の作品を物語の時代設定順に読んでいくと、移りゆくイギリスの様子がはっきりと浮かび上がってくる。特に田園風景の移り変わりやロンドンの開発の様子、そしてそれに伴った人びとの生活様式の変化をうかがわせる描写は、20世紀のイギリス文化について学ぼうとする者にとって大変有意義なものとなっている。そこで本論文では、前回の論文「アガサ・クリスティの田園——アガサ・クリスティ作品から読み解く20世紀イギリスの田園の変遷（1）1910年代から1930年代まで」（以後、「アガサ・クリスティの田園（1）」と省略して記す）に引き続き、「アガサ・クリスティの田園（1）」で取り上げた作品を除き、1940年代から1950年代に出版されたクリスティ作品の中に描かれたイギリスの田園風景の変化の様子を年代順にまとめていく。その際、前回同様、ミス・マーブル（Jane Marple）の住むセント・メアリ・ミード村（St. Mary Mead）を中心に、都会化していく田舎の様子、衰退していくカントリーハウスの様子を分析していく。なお、推測可能な限り、物語の語りの現在の年代設定順で作品を並べていくため、出版の順番とは異なったり、出版年代とは異なるセクションで取り上げたりすることがある。また、クリスティ作品はイギリスとアメリカでの出版の時期が異なることが多いが、原則として長編はイギリスで本として出版された年を示し、短編はイギリスで雑誌掲載された年を示すこととし、さらには可能な範囲で、それぞれの作品の舞台が設定されていると考えられる年代を示すこととする。各作品の年代設定については必要に応じて注を付けて解説するが、ミス・マーブル作品の年代設定については、拙論「透明な批評」で読むアガサ・クリスティ——ミス・マーブルの履歴書（1）年齢」（以後、「ミス・マーブルの履歴書（1）」と省略して記す）で論じているので、詳細はそちらを参照されたい。

1. 1940年代前半——第二次世界大戦中

1940年代を舞台としたクリスティ作品には第二次世界大戦の影響が色濃く表われている¹⁾。戦争の影響が最も明確に描写されていると言われているのは、セクション「2. 1.」で取り扱うポワロ (Hercule Poirot) 作品の『満潮に乗って』(*Taken at the Flood*, 1948年)で、この作品には1944年のロンドンでの空襲の描写が鮮明に描写されている。本セクションでは、作品中の言及から、作品の舞台が第二次世界大戦中であることがうかがえる『カーテン』と『動く指』(*The Moving Finger*, 1943年)を扱いながら、クリスティ作品に描かれた1940年代前半の田園の姿を考察する。

1. 1. 『カーテン』(*Curtain*) : ポワロ作品、出版は1975年だが、執筆は第二次世界大戦中²⁾、1940年の設定

まず『カーテン』の舞台設定だが、「アガサ・クリスティの田園(1)」のセクション「1.」でも述べたように、『カーテン』で『スタイルズ荘の怪事件』での事件が起こったのは1916年であったことが明らかにされ、登場人物たちの会話から、『カーテン』での出来事は『スタイルズ荘の怪事件』から「20年と少し」(169頁)経ったあとに起こっていることが分かる。さらに、「2度目のさらに悲惨な戦争」(1頁)という表現から、本作品の出来事は第二次世界大戦勃発後に起こっていることも分かる。また、1939年7月の事件を扱う『杉の柩』(*Sad Cypress*, 1940年)への言及があるうえ、本作品の出来事は6月に起こっていることから、作品の舞台は1940年以降となる。終戦後が舞台なら、登場人物は「20年と少しあと」とは述べず、「30年近くあと」と述べるであろうから、おそらく『カーテン』の舞台は作品が執筆された1940年の設定なのだろう³⁾。

「カントリーハウス」(2頁)、スタイルズ・コート (Styles Court) はすでにカヴェンディッシュ (Cavendish) 家から売りに出され、現在、大きく改装され、ゲストハウスに様変わりしている。デイヴィッド・キャナダイン (David Cannadine) (630, 640頁) やアラン・ハウキンズ (Alun Howkins) (145~46頁)、そしてエイドリアン・ティニスウッド (Adrian Tinniswood) (『野望』8, 19頁) などによると、第二次世界大戦の間に死亡税 (相続税) は65パーセントにまで跳ね上がり、その後、100万ポンドを越す価値のある地所は75パーセントを課せられたという⁴⁾。キャロライン・シーボーム (Caroline Seebohm) は

戦争〔第二次世界大戦〕勃発時、当時の死亡税率だと、(明らかにこれはもはやあり得ないことではなかったが) 10年の間に2つの死を経験したら、それはほとんどどんな地所も解体するのに十分だった。1940年の死亡税法は、兵役中に亡くなったために2回以上所有者が変わった地所に対しては死亡税を免除することで、ある程度この懲罰的な状況を修復した。しかし、1945年、不動産税は耐え難いほど高いままで、遺言執行者たちが死亡税のせいである種の自由保有不動産権と賃貸借不動産権を売りに出さねばならなかった状況は続いていた。(58頁)

と指摘している。ピーター・マンドラー（Peter Mandler）が大邸宅にとっての「弔鐘」（316頁）と呼ぶそうした税と物価高により、カントリーハウスは「金を食い尽くすモンスター」（キャナダイン 638頁）と化し、1945年以降直ちに多くの地所が市場に出された（キャナダイン 638頁）。マンドラーによると、売りに出されたカントリーハウスの大多数はその所有者を事業団体に変えたという（326～27頁）⁵⁾。『スタイルズ荘の怪事件』での事件解決後、地所スタイルズを相続した（と思われる）ジョン・カヴェンディッシュ（John Cavendish）が亡くなった際、こうした状況下、おそらく法定相続人であった（と考えられる）弟ローレンス（Lawrence Cavendish）もスタイルズ・コートを含む地所スタイルズを手放さざるを得なかったのだろう。

約20年ぶりに当地を訪れたヘイスティングズ（Arthur Hastings）は、以前は「理想郷」（『スタイルズ荘の怪事件』27頁）のように思われた思い出の地、スタイルズ・セント・メアリ村（Styles St. Mary）の変わりように一抹の寂しさを隠せない。

このとき、列車がスタイルズ・セント・メアリ駅に到着したため、私の黙想は中断された。少なくとも駅は変わっていなかった。時の流れも駅には影響を与えていなかった。駅はいまだに野原の真ん中にあったが、見たところ、そこに存在していなければならない理由は何ひとつないように思われた。

しかし、私の乗ったタクシーが村を抜けているとき、私は年の流れを実感した。スタイルズ・セント・メアリ村は見る影もないほど変わってしまっていた。何軒ものガソリンスタンド、1軒の映画館、小さな旅館が2軒増え、低家賃の公営住宅が何重も列をなしていた。

しばらくするとタクシーはスタイルズ・コートの門から敷地内に入った。ここで再び現代から過去に戻ったかのようだった。パークは私が記憶しているものとほぼ同じだったが、私道は手入れが行き届いておらず、砂利の上にまで雑草が生い茂っていた。角を曲がると屋敷が見えてきた。屋敷は外側から見ると変わっていなかったが、外壁は塗り直す必要に迫られていた。（5頁）

また、『スタイルズ荘の怪事件』のころとは異なり、ゲストハウスに改装されたスタイルズ・コートに集う人びとはいわゆるジェントリー階級ではない。登場人物の1人、エリザベス・コール（Elizabeth Cole）は、『「破産した良家の出の人びとが経営するゲストハウス。そこには人生に失敗した人びと——これまでも、そしてこれから何も成し遂げることのない人びと、人生に挫折し、打ちひしがれた人びと、年老いて、疲れ、運の尽きた人びと——が集まっています』」（85頁）と語る。ヘイスティングズは現在のスタイルズ・コートとかつてのスタイルズ・コートとの差に「愕然とし」、「悲嘆と落胆」（85頁）で絶叫しそうになる。第一次世界大戦中に心身ともに傷ついた兵士を癒す場所として存在していた田園は、再度の世界大戦の訪れとともに、その姿を大きく変えていっていることがうかがえる。

1. 2. 『動く指』（*The Moving Finger*）：ミス・マープル作品、1943年出版、1941年設定

「ミス・マープルの履歴書（1）」のセクション「1. 4. 1.」で論じたように、『スタイルズ荘の怪事件』において、ヘイスティングズが第一次世界大戦で負傷し、スタイルズ・コートを訪れ

たのと同じように、一人称の語り手ジェリー・バートン (Jerry Burton) が第二次世界大戦中の英国空中戦 (バトル・オブ・ブリテン、1940年7月～10月) で負傷し⁶⁾、5か月の入院生活のあとの春にリムストック町 (Lymstock) という「小さな田舎のマーケット・タウン」(9頁) に静養に来たとすると、『動く指』は1941年の設定と考えられる⁷⁾。ここでも、イギリスの田園は戦火で傷ついた心身を癒す土地、「エデンの園」(98頁) として描かれている。

ジェリーの視点で語られるリムストック町は、ヴィクトリア朝時代で時の止まった、50年前の世界のままの町である。人びとは家に鍵をかけずに外出し、どこかにまだ迷信や魔女信仰が残っているような古き良き田園として描かれている。しかし、『スタイルズ荘の怪事件』において、ヘイスティングズが語るスタイルズ・セント・メアリ村が理想化されていたのと同様に、ジェリーが何度も「発展の遅れた地域」(9, 10頁) と呼ぶリムストック町にも都会化、近代化の波が押し寄せ、戦争の影響を隠すことはできなくなっている。すでに、戦前を描いた『殺人は容易だ』

(*Murder Is Easy*, 1938年) の冒頭で、殺人鬼の犠牲となる老嬢ミス・ピンカートン (Lavinia Pinkerton) が「様々な税と減少する配当金、そして値上がりする使用人の賃金など」(7頁) について語り、節約の必要性を説いていたが、戦時中を描く『動く指』ではその状況が悪化しているようだ。戦前は海外 (の植民地) に投資していたが、戦争の影響で配当が入らなくなり、戦時中の高い税を支払うため⁸⁾、持ち家を貸し、自らは間借りをするを余儀なくされる高齢者たちの代表として、リトル・ファーズ (Little Furze) をジェリーとジョアンナ (Joanna Burton) 兄妹に貸すミス・バートン (Emily Barton) の様子が描かれている⁹⁾。

また、この町の「部外者」(3, 140, 149, 176, 232頁) はバートン兄妹だけではない。よく読めば、弁護士リチャード・シミングトン (Richard Symmington) や医者オーウェン・グリフィス (Owen Griffith) など、リムストック町のハイ・ストリートで商売を営む人びとの多くは最近 (グリフィスは5年前に) この地に越して来た人たちである。古くから (少なくとも親の世代から) 地元に住んでいるミス・バートンは、最後は当初部外者と見なされていたジェリーに家を売ることになる。ヴィクトリア朝時代から時が止まったように見える町 (あるいはクリスティの他作品では村) と設定されている田園も、外部から入って来た人びとの商売などで成り立ち、カントリーホームとしての邸宅は富裕層 (バートン兄妹は出身は田舎のようだが、幼少期からロンドンのおばのもとで何不自由のない生活をし、「裕福」(201頁) で、働く必要のない階級に所属している) の手に移っていき、明らかに郊外化していつている。クリスティの描く田園は、時の流れとともに、確実に変容しているのである。

2. 1940年代後半——第二次世界大戦の影響 (1)

本セクションでは、1950年代に出版されたものも含めて、作品中の言及から、第二次世界大戦後の1940年代後半の世界が描かれている3つの作品を分析する。

2. 1. 『満潮に乗って』(*Taken at the Flood*) : ポワロ作品、1948年出版、1946年設定¹⁰⁾

セクション「1.」でも触れたように、『満潮に乗って』は戦争の影響が最も色濃く表れている作品で、1944年10月にロンドンでの空襲の犠牲者となった資産家の財産相続をめぐる展開する

愛憎劇である。序章は空襲警報発令中のロンドンでボワロがクラブに避難する様子の描写から始まり、序章の後半は第二次世界大戦終結後の1946年5月にボワロが事務所で訪問客を迎える場面に話が移り、その後、「イングランドの田園」(56, 180頁)で起こった殺人事件の謎解きが進んでいく。戦争中に戦地で命を落とした1人息子の死を悼む夫婦、ロンドンからの疎開者たちを受け入れた際の苦労話、戦後の人手不足、動員解除によって若者が帰郷し、仕事に復帰する様子、用人問題、若者の農業離れ、物価高と高い税による財政難、配給制が続いているために食料や物品を手に入れるのに苦労する様子、闇市の存在などが随所で描かれ、第二次世界大戦の直接の影響が作品全体に暗い影を落としている。登場人物の1人、リン・マーチモント (Lynn Marchmont) は戦争が人びとの心に残した闇の部分の次のように描写している。

感情という空気の中に波のようなうねりがあった——何か強い電流のような——何の流れだろう？ 憎悪の？ 本当にそれが憎悪であるということはあるのだろうか？

とにかく何かが——破壊的なものがあった。

リンは突然思った。「でも、それがあらゆる場所で問題になっていることなのだ。私は帰郷してからずっとそのことに気が付いていた。それは戦争が残した後遺症なのだ。悪意ある意思。悪意に満ちた感情。それがありとあらゆるところにある。鉄道にもバスにも商店にも、労働者や事務員や農業労働者の間にさえも。そしておそらく炭坑や工場では事態はもっとひどいのだろう。悪意ある意思」(49頁、強調は原典によるもの)

本作品では、戦時中の混乱に乗じて他人のアイデンティティを借用する「なりすまし」が殺人事件を引き起こす原因となるのだが、その深刻さについて、このあとセクション「2. 3.」で論じる『予告殺人』(*A Murder Is Announced*, 1950年)で、ミス・マーブルとクラドック警部 (Detective-Inspector Dermot Eric Craddock) が詳しく語ることになる。

2. 2. 『ねじれた家』(*Crooked House*) : 1949年出版、1947年設定¹¹⁾

第二次世界大戦直後の1945年、所有者が戻ってみると、第二次世界大戦中接収されていた地所は「住居は混乱状態にあるか、損害を受けており、パークは食べ物を育てるために掘りおこされ、ガーデンには雑草が生い茂り」(クライヴ・アスレット (Clive Aslet) 203頁)、「欄干や門は徴用されていた」(キャナダイン 628頁) という。

飛行場、組み立て式かまぼこ形兵舎、爆弾・ライフル銃練習場、軍需品臨時集積場、地雷、ラジオ・電話施設が、カントリーハウスの景観と切っても切り離せない一部だった、かつて美しかったパークランド〔田舎の大邸宅の周囲の緑地〕に損失をもたらした。かけがえのない木々が切り倒され、模造建築物や噴水はめちゃくちゃに破壊された。〔・・・〕ガーデンには草木が生い茂り、貴重な植物は失われ、〔・・・〕芝生は荒れ地となり、私道は戦車で表面がでこぼこにされ、垣根は倒され、低木は破壊された。(シーボーム 60頁)

ジョン・マーティン・ロビンソン (John Martin Robinson) によると、特にロンドンや他の都市

の古い建築物の鉄製部分のほとんどが取り去られてスクラップにされたというが（『戦時のカントリーハウス』166頁）、『ねじれた家』でも鉄不足から、ロンドン郊外の大邸宅の門が「愛国心か無慈悲な徴用」（26頁）によって撤去されたままの様子が描写されている。

2. 3. 『予告殺人』（*A Murder Is Announced*）：ミス・マーブル作品、1950年出版、1948年設定¹²⁾

事件の起こるチップング・クレグホーン村（Chipping Cleghorn）は、家に鍵をかけておく必要がないような、一見、のどかな古き良き場所として描かれているように思われる。州警察本部長（Chief Constable）の説明によると、チップング・クレグホーン村は

「四方に不規則に広がる、絵のように美しい大きな村。肉屋、パン屋、食料雑貨店、非常に信頼のおける骨董品屋——2軒の軽食堂。この村はここが美しい場所であることを自覚している。自家用車で旅行をする観光客にサービスを提供している。多くの人びとが住んでいる居住地域でもある。かつては農業労働者たちが住んでいたコテッジ〔田舎家〕は改良され、今は年配の独身女性たちや引退した夫婦が住んでいる。中にはヴィクトリア朝時代に建てられた建物もある」（42頁）

場所である。しかし、「ミス・マーブルの履歴書（1）」のセクション「1. 5.」で論じたように、この村にも確実に第二次世界大戦の影響が現れている。食糧不足により、村人たちは自ら野菜や果物を栽培し、家畜を飼育する。家に鍵をかけておかないのは違法な物々交換を秘密裏に行うためである。配給制、闇市、燃料不足（暖炉で暖が取れる間はセントラル・ヒーティングを使わない節約）、物価の上昇、高い税、低い利息、送金の困難さ、労働者不足、使用人不足、住み込みの使用人の激減、日雇い（通い）の使用人、荒れたままの地所、物騒な世の中、犯罪件数の増加、脱走兵への言及があちこちに見られる。不足している労働力の担い手として、外国からの難民たちが住み込みの使用人として働いているが、難民たちは、自分たちが思い出したくない第二次世界大戦のことを目の前に突きつける、外からの闖入者として、いわれなき差別の対象となっている。また、田園の村や町ではどこでも「大邸宅は売り払われ、コテッジは改装され、造り替えられて」（133頁）おり、上述のように、チップング・クレグホーン村でも、「かつては農業労働者たちが住んでいたコテッジは改良され、今は年配の独身女性たちや引退した夫婦が住んでいる」（42頁）。作品の舞台となっている邸宅リトル・パドックス（Little Paddocks）に集う人びとは皆、当地では新参者のようであり、その多くが身元を偽っていることが明らかになる。

ミス・マーブルによれば、こうした村の変化はセント・メアリ・ミード村にも顕著になっているという。平穏だったセント・メアリ・ミード村でも銀行強盗があったというし、ミス・マーブルが嘆くように、以前はよそから誰かが引っ越して来る場合は紹介状を持って来たり、誰かの知り合いだったりしたのだが、やって来た人の正体を確かめるすべがなくなっている。

「そのこと〔村人たちは本当に名乗っているとおりの人たちなのか〕があなたを悩ませているからなのではないですか？ それに、戦争〔第二次世界大戦〕以来、まさにそんな風に

世の中が変わってしまったんです。例えば、この場所、チップング・クレッグホーン村です。ここは私の暮らしているセント・メアリ・ミード村にとっても似ています。15年前、私たちは皆が誰だか知っていました。大邸宅に住んでいるバントリー（Bantry）家と——ハートネル（Hartnell）家と、プライス＝リドリー（Price Ridley）家と、ウェザビー（Wetherby）家……。彼らがそこに住む前には、彼ら自身の父母と祖父母、あるいはおじやおばがそこに住んでいました。誰かが新しくそこに引っ越して来たときは、紹介状を持っていましたし、あるいはすでにそこに住んでいる誰かと同じ陸軍部隊に属していたか、同じ船で兵役を務めた経験がありました。誰か新しい人——本当に新しい人——本当に誰も知らない人——が来ると、そうですね、彼らはとても目立ちました——皆が彼らのことを怪しみ、彼らが何者か判明するまで落ち着きませんでした」

彼女〔ミス・マーブル〕は穏やかにうなずいた。

「でも、もはやそのようなことはありません。どの村も、小さな田舎町も、何の縁もゆかりもなくやって来て、そこで暮らし始める人びとで一杯です。大邸宅は売り払われ、コテージは改装され、造り替えられています。そして人びとがやって来ます——そして私たちが彼らについて知ることができるのは、彼らが自分たちについて語るだけです。ご存じでしょうけれど、彼らは世界中からやって来ます。インドから、香港から、中国からやって来る人びと、フランスやイタリアの生活費のかからない狭い場所や辺鄙な島に暮らしていた人びと。それに少しばかりお金を稼いで、引退する余裕ができた人びと。でも、彼らが本当は何者なのか、もはや誰にも分りません」(132～33頁、強調と省略は原典によるもの)

クラドック警部によれば、それが犯罪を引き起こす原因にもなっている。彼は上記のミス・マーブルの説明を聞き、次のように考えをめぐらす。

そして、それこそがまさに本当に自分の心に大きくのしかかっているのだ、とクラドックは思った。彼には分らなかったのだ。分かっているのは顔と特徴だけで、彼らは配給手帳と身分証明書——適切で正確な身分証明書だが、数字は書かれているものの、写真や指紋は貼られていなかった——で裏付けされていた。少し手間をかければ、誰でも適当な身分証明書を手に入れることができた——そしてそれが原因の一部となって、これまでイングランドの田舎の社会生活を保ってきた、より繊細な結びつきが崩壊してしまったのだ。町では誰も自分の隣に住んでいる人を知らなくて当然だった。田舎でも今では、自分では知っているつもりでいるのかもしれないが、誰も自分の隣に住んでいる人のことを知らなかった……。

〔……〕それ〔人の身元を確認すること〕は15年前ほど容易なことではなかった。他人のアイデンティティを借用して——都市での「事故」で突然死した人びとから借用して——国の中を行き来している人がいることを彼は知りすぎるほど知っていた。アイデンティティを買い上げたり、アイデンティティや配給手帳を偽造したりする組織が存在していた〔……〕。

(133～34頁、強調と最初の省略は原典によるもの)

第二次世界大戦以前を舞台にしたクリスティの作品にもアイデンティティを偽っている人びとは

登場しているが¹³⁾、彼らが作品の謎解きの対象となっている殺人事件や犯罪に直接関係していることはそれほど多くない。しかし、『予告殺人』を含め、第二次世界大戦以降の世界を描いた作品になると、戦時中や戦後の混乱時の「なりすまし」が事件と直接かかわっている作品が多く描かれるようになる。それが最も顕著なのが、セクション「2. 1.」で取り上げた『満潮に乗って』である。それと同時に、親族のつながりの希薄化も生じている——「『世相を示す別の例ですね』とミス・マーブルは言った。『近頃、私たちは大抵の場合、自分たちの若い世代の親戚のことをまったく知りません。昔は大家族の集いがあったので、そんなことは起こり得ませんでした』」(141頁、強調は原典によるもの)。このように、『予告殺人』は、近代化の波と、第二次世界大戦の影響で、田園風景の変化に拍車がかかっていることが誰の目にも明らかになる作品である。

3. 1950年代——第二次世界大戦の影響（2）

「アガサ・クリスティの田園（1）」のセクション「2.」で述べたように、第一次世界大戦直後は土地の価値の下落や高額の手当税や死亡税（相続税）が負担となり、多くのカントリーハウスが売却されたが、キャナダインの第13章「第二次世界大戦」第3節「死と破壊」と第14章「終戦」第1節「豊かさと言窮」、そしてロビンソンの『戦時のカントリーハウス』の第1章「グラント・プラン」と第8章「損害と破壊」と『接収されて』の「イントロダクション」で詳しく説明されているように、第二次世界大戦後は、大戦中に接収された際にひどい取り扱いを受けたことが原因で¹⁴⁾、もとの状態に戻せなくなり、取り壊されるカントリーハウスが多く存在した¹⁵⁾。

しかし、カントリーハウスが戦時中に占有されたことには犠牲がなかったわけではない。イングランドのカントリーハウスは、敵の攻撃が直接の原因となって破壊されたものは少数だった——コーンウォールのマウント・エッジカムは有名な例外である——が、相当の数が戦時中にそこを占有していた者たちによって修繕できないほどの損害を与えられた¹⁶⁾。[･･･] カントリーハウスは1945年に、あまりにもひどい状態で放置されていたため、復元不可能のように思われた。適切な維持が行われなかったため、配管は破裂し、天井は崩壊し、木材の乾腐病がいたるところにはびこっていた。戦争〔第二次世界大戦〕に続く10年間に1,000軒ものカントリーハウスが取り壊されたことは、対応の遅れた戦争による損失であり、戦時中に受けたひどい取り扱いがもたらした直接の結果であった¹⁷⁾。そうしたカントリーハウスの取り壊しは16世紀の修道院の解散に匹敵すると言われている。

[･･･] 接収されたカントリーハウスの多くは戦後2度と私人の個人宅となることはなかった。タインハムのボンダ家のように、家も地所もすべて失った家族もいた。戦時中に受けた損害の直接の結果として、何百軒ものカントリーハウスが取り壊された。それらは接収という浮沈のあと、修繕する金銭的余裕がない持ち主たち、あるいはあまりにも落胆させられ、修繕しようという気持ちにならない持ち主たちによって遺棄された[･･･]。(ロビンソン『接収されて』7～8頁)

運よく取り壊しは免れても、第一次世界大戦後同様、第二次世界大戦後も、法定相続人の戦死¹⁸⁾

や死亡税（相続税）の高騰¹⁹⁾、そして使用人となる人材の欠如²⁰⁾などでカントリーハウスの運営は困難を極め、当主たちの中にはカントリーハウスを手放さざるを得なくなった者も多くいた。しかし、ティニスウッドによると、人里から離れていたり、大きすぎたり、近代的な設備が整っていないものに買い手は現れなかったという（『野望』105頁）。

おそらく主要な寝室が10室あり、戦争〔第二次世界大戦〕以前は中位の大きさと思われていたカントリーハウスは、今や〔1950年代〕購入者となる可能性の高い顧客からはスタッフを揃えるのが難しく、運営するには非経済的な巨大なカントリーマンション〔田園の大邸宅〕と見なされるようになった。不動産会社ジャクソン＝ストップスは1950年の傾向を振り返って、「多くの場合、不幸な所有者が、もしもしばしば厄介な重荷となっているものを排除したいと願っているときに頼りにしなければならないのは解体業者である」と認めなければならなかった。（『野望』106頁）

こうした歴史的背景を受けて、1950年代のクリスティ作品にも第二次世界大戦後、その影響により姿を消していくジェントリーと変容していくカントリーハウスが描かれている。そこで本セクションでは、1950年代に出版された3つのポワロ作品と3つのミス・マーブル作品を取り上げ、分析していく。

3. 1. 『マギンティ夫人は死んだ』（*Mrs. McGinty's Dead*）：ポワロ作品、1952年出版、1948年から1952年の間の設定²¹⁾

舞台となるブロードヒニー村（Broadhinny）が直面している問題は（殺人事件を除くと）使用人不足である。常駐の使用人が手に入りにくくなり、雇っていたドイツ人の使用人に1か月でやめられてしまい、慌てる雇用主の様子が描かれるだけでなく、この作品で殺人の犠牲者となるのは、何軒もの家を掛け持ちする、日雇いの通いの家政婦（charwoman）となっている。こうした有様は、次にあげるE・S・ターナー（E.S. Turner）による当時の使用人事情そのものである。

1931年、イギリスの家庭の5パーセント近くに常勤の住み込みの使用人がいたが、1951年までにその比率は1パーセントになった。所得税が導入される前は年収1,500ポンドの世帯主は自分の収入の50分の1でハウスメイドを1人雇い、食べさせ、給料を払うことができたときもあった。しかし、当時〔第二次世界大戦後〕、住み込みのハウスメイドを1人雇ったら、使用可能な収入の5分の1程度を支払わねばならなかっただろう²²⁾。車の所有と休暇を犠牲にしなければ、身の回りの世話をしてもらうという贅沢はできなくなってしまったので、世帯主は週1回、午前中に日雇いのお手伝いさんに来てもらい、週1回、夕方にベビーシッター（カリフォルニアで考案されたいし、ナースメイドの新しい代行者）に来てもらうことで手を打った。もう少し羽振りのいい中産階級の人びとは、明らかに必要経費の範囲内で、再びヨーロッパからメイドを輸入し始めた。（295頁）

戦後の使用人問題の原因は労働者数の減少だけにあるのではなく、労働者の態度の変化にもあった。

その戦争〔第二次世界大戦〕までは、執事、メイド、そして他の使用人が十分揃っていることがイングランドの多くの大きなカントリーハウスの標準であった。一気にこの使用人の一団が姿を消し、彼らの多くは2度と戻って来なかった。実際にこの戦争は、他の場所でもっと高い給料をもらえるいい仕事を見つけられることを知った、多くの労働者階級の女性たちにとって、使用人の仕事を時代遅れなものに変えてしまった。(シーボーム 38～39頁)

マンドラーによると、使用人になることは「みっともない」(315頁) こととしてとらえられ、特に都会の娯楽から離れた場所にある田舎で使用人になることは「最も卑しい仕事」(315頁) と見なされるようになったという。ティニスウッドは使用人の減少の理由として「女性にとって工場やオフィスでの別の仕事の機会が増えたこと、使用人になることは品位を下げることと見なされていたこと、制服を着ることや、自主性が与えられず、ほとんど自由時間がないことに抵抗があったこと」(『野望』 334頁) を挙げている。

その結果、「使用人不足のために、人びとはまったく使用人に向いてない、あるいは訓練を受けていない使用人を雇わなければならなくなった」(シーボーム 39頁)。『マギンティ夫人は死んだ』でも、ブロードヒニー村で郵便局を経営するスウィーティマン夫人(Mrs. Sweetiman)は、住み込みの使用人として新しく村にやって来た女性のマナーのなさについての会話の中で、次のように嘆く。

「ああ」とスウィーティマン夫人は言った。「最近の女の子たちは家事奉公職に就くために必要な訓練を受けていません。私の母は13歳で奉公を始め、毎朝5時15分前に起きていました。奉公を終えるころにはハウスメイドのトップになっていて、3人のメイドが彼女の下にっていました。そして母は彼女たちに適切な指導も行いました。しかし、最近はそんなことは何ひとつ行われません——最近の女の子たちはそんな訓練を受けませんし、〔スウィーティマン夫人のアシスタントの〕エドナ(Edna)のように単に学校教育を受けているだけです」(205頁)

また、ティニスウッドによれば、「『至福の日雇い』、つまり、住み込みではなく、料理をし、掃除をし、時折食事の給仕をするためにパートタイムで来てくれる地元の女性たちを雇うことが、この〔使用人不足〕問題を解決するために最も広範囲で採用された方策であったことに疑いはなかったし、当主が彼女たちを利用しないカントリーハウスはほとんど存在しなかった」(『野望』 338頁)という。300年の歴史を誇るブロードヒニー村のカントリーハウス、ロング・メドウズ(Long Meadows)は、すでに経済的に立ち行かなくなっていたところに、死亡税(相続税)が追い打ちをかけたために、現在ゲストハウスとして運営されているが、ここで働くのも住み込みの使用人ではなく、週2回訪れる日雇いの家政婦、マギンティ夫人(Mrs. McGinty)であった。そのマギンティ夫人が殺されたあと、彼女に代わってロング・メドウズに通うことになった家政婦は、

夫や高齢の母親や子どもたちの体調不良を理由に休んでばかりで、サマーヘイズ夫妻（John (Johnnie) Summerhayes and Maureen Summerhayes）を大いに悩ませている。こうした日雇いの通いの使用人たちにはかつてのような、雇い主への忠誠心は期待できず、『マギンティ夫人は死んだ』にも、マギンティ夫人のような、仕事はできるが、奉公先の秘密を嗅ぎまわる通いの使用人が登場することになり、結果、まさにそのことが殺人事件を引き起こす原因となるのである。

また、第二次世界大戦中、空爆などによって多くの資料が失われたり、遺体の身元確認が困難を極めたりしたために、「なりすまし」が可能となり、人びとのアイデンティティが曖昧になっていることも、本作品での殺人事件を引き起こす原因の一端となっている。セクション「2.3.」で取り上げた『予告殺人』でミス・マーブルやクラドック警部が口にしていた懸念を、スペンス警視（Superintendent Bert Spence）もボワロに向かって次のように語っている。

「現在どういう状況にあるかお分かりでしょう。戦争〔第二次世界大戦〕がすべての人間を、そしてすべてのものをひっかき回してしまった。リリー・ガンボール（Lily Gamboll）がいた少年院は空爆の直撃を受けて、その記録とともにすべて失われてしまった。人間だってそうだ。今の世の中で最も難しいのは、人びとを調査することだ。例えばブロードヒニー村なら——私たちがその身元を知っているブロードヒニー村の住人と言えば、当地に300年住んでいるサマーヘイズ家と、エンジニアのカーペンター（Carpenter）家の一員であるガイ・カーペンター（Guy Carpenter）だけだ。他の人びとは皆——そうだなあ——流動的だ、とでも言ったらいいのだろうか？ レンデル医師（Dr. Rendell）のことは医師名簿に載っているので、彼がどこで訓練を受け、これまでどこで開業してきたかは分かるが、彼の生まれ育った環境までは分からない。彼の妻はダブリン近郊から来た。ガイ・カーペンターと結婚する以前はイヴ・セルカーク（Eve Selkirk）だったイヴは、きれいな若い戦争未亡人だった。でも誰だってきれいな若い戦争未亡人になれる。ウェザビー夫妻（Roger Wetherby and Edith Wetherby）を例に挙げれば——彼らはここ、あそこ、そしてあらゆる場所へと世界中を転々としてきたようだ。なぜだろう？ 理由があるのだろうか？ 彼は銀行から横領したのだろうか？ あるいは彼らはスキャンダルを引き起こしたのだろうか？ 人びとについて探り出すことはできないと言うつもりはない。できるだろう——ただし、時間がかかる。彼ら自身は何の手助けにもならない」（215～16頁²³⁾）

さらに、この引用にもあるように、ブロードヒニー村では、当地出身の家系は2つだけで、それ以外は皆新しく越して来た人びととなっていることもあり、ここではすでに古き良き共同体に見られたネットワークが崩壊している。1930年代のクリスティ作品の田園の筆頭と言えばセント・メアリ・ミード村であり、その特徴はゴシップであると言っても過言ではなく、秘密とは名ばかりのものでしかなかったが、1950年代が舞台となっている（と思われる）本作品では、（ゴシップが適切なのかは別として、）ゴシップが広く伝達され得る人びとのつながりが希薄で、秘密は公になることなく、秘密のまま保たれている——「ここ〔ブロードヒニー村〕では、うわさを広める地元の情報網が作動していなかった」（109頁）。だからこそ、マギンティ夫人のゆすり行為

が可能となるのは何とも皮肉な展開である。ブロードヒニー村の使用人の質の低下（とそれを象徴する殺人事件）は、確実に、第二次世界大戦後の新しい社会の様子を写し出している。

3. 2. 『葬儀を終えて』(After the Funeral) : ポワロ作品、1953年出版、1951年から1953年の間の設定²⁴⁾

「アガサ・クリスティの田園(1)」で、その中でも特にセクション「2. 2. 2.」で、第一次世界大戦後、イギリスのカントリーハウスは売却されたのち、取り壊され、新興住宅地となったり、ホテル、学校、ユースホステル、病院や他の施設に改造されたりする運命を迎えるものが多かったことを解説したが、第二次世界大戦後もそれまでの姿をとどめるカントリーハウスは多くなかった。

大邸宅の中にはカトリックの神学校や女子修道院、私立学校、少年院、孤児院、ゴルフ・クラブ、あるいは主要な産業や商業の会社のそうそうたる本社や会議場に変えられるものがある一方で、無残にも取り壊されるものもあり、1920年から1955年の間に450軒ほどが取り壊された。1945年以降、明らかに建築的にも、歴史的にも重要な250軒の大邸宅が消滅し、個人の手元に残っているのは1,000軒程度である。(ローレンス・ストーン・アンド・ジーン・フォーティエ・ストーン (Lawrence Stone and Jeanne C. Fawtier Stone) 425～26頁)

『葬儀を終えて』でも、当主の死去に伴い、広大なカントリーハウス、エンダビー・ホール (Enderby Hall) が売り出されるが、そこを維持するのに十分な使用人を集めることが不可能なため、富裕層の人びとでさえ買おうとしないという事実、に、登場人物の誰ひとりとして驚く様子のないことが描写される。エンダビー・ホールの購入に興味を示すのはY W C Aや収集品を保存しようとしているトラスト団体だけである。

誰がここを買うのだろうか？ と彼女はいぶかった。ホテルか施設、あるいは若者向けのああしたホステルに改装されるのだろうか？ それが最近こうした巨大な家に起こっていることだ。住むために買う人などいない。おそらく取り壊され、住宅団地が建設されるのだろう。(26～27頁)

「ここはもう個人宅ではなくなるのだろうと思うことは私にとって悲しいことであることをご理解ください。しかし、最近の状況はよく分かっています。ここに住む余裕のある家族などいないでしょう——それに、若い紳士淑女の皆さんがここに住みたがるとは思いません。最近家事使用人を見つけるのはあまりにも難しく、もし見つけられたとしても、高額で、満足のいくものではないでしょう。こうしたすばらしい邸宅はもう役目を終えたことを私はよく理解しています」〔執事の〕ランズコム (Lanscombe) は再びためいきをついた。「もしもここが——何かの施設になってしまうのなら、あなた様がおっしゃったような種類のものであれば嬉しく思います」(176頁)

テキストにエンダビー・ホールが第二次世界大戦中に接収されていたという描写は存在しないが、エンダビー・ホールには後継者も、買い手もおらず、おそらくこのカントリーハウスは次世代に引き継がれることなく、分割され、消滅していくか、取り壊されることが予想される展開は、第二次世界大戦後のカントリーハウスの状況を想起させる。その点を考慮すると、物語の中に、戦争によって破壊された桟橋が再建されることなく、失われた風景は失われたままとなっていることが指摘されている箇所があり、それがボワロに犯人の正体を教える重要なヒントとなっているのは意味深長である。

カントリーハウスの運営が困難な理由はその広さだけにあるわけではない。エンダビー・ホールの当主の弟が暮らす「マナーハウス」(120頁)、スタンズフィールド・グレンジ (Stansfield Grange) も第二次世界大戦の影響で「手入れが行き届いておらず」(74頁)——2人いた庭師は第二次世界大戦時に召集され、現在勤めている年長いた庭師1人では庭園の管理は手に負えず²⁵⁾、家屋の外壁のペンキははげたまま、使用人の費用が高騰してしまい、常駐の使用人はおらず、通いの日雇いの女性で何とかやりくりをしている——、病身の(と少なくとも本人は主張している)夫に代わって邸宅の切り盛りをする妻は、義兄の遺産が入らなければ、邸宅を売り払わねばならなかったことを嘆いている。1954年まで続いた配給制による食料品の手に入りにくさについての言及が繰り返されるなど、この作品にも第二次世界大戦の影響が続くイングランドの様子が随所に現れている。

3. 3. 『ポケットにライ麦を』(*A Pocket Full of Rye*): ミス・マーブル作品、1953年出版、1948年から1953年の間の設定²⁶⁾

作品の舞台は趣味の悪い成金、投資信託会社社長レックス・フォーテスキュー (Rex Fortescue) が自らの富を見せびらかすために所有するロンドン郊外の大邸宅、ユーツリー・ロッジ (Yewtree Lodge) である。この邸宅のある地域ベイドン・ヒース (Baydon Heath) はロンドンの金融街で成功した人びとが好んで住む地帯で、新築の赤レンガの住宅が次々と建てられている。1920年代から1930年代に、当時皇太子であったエドワード8世のゴルフ好きの影響で、「ゴルフ場への近さか、あるいはもっと好ましいのは、自分専用のゴルフ場を持つことがカントリーハウスでの生活での人気のある附属物となった」(ティニスウッド『週末』231頁) 当時の流行を写し出すかのように、ユーツリー・ロッジから歩いて行けるところにあるものを含め、ベイドン・ヒースには3つのゴルフ場があり、滞在するゴルファーたちのためのホテル、ゴルフ・ホテル (Golf Hotel) も存在している。

この作品では、事件の捜査を担当するニール警部 (Inspector Neele) の回想の中にカントリーハウスが登場するが、大邸宅ハーティントン・パーク (Hartington Park) は、すでにナショナル・トラストに譲渡されている。ナショナル・トラストは、1931年の財政法 (Finance Act) と1937年のナショナル・トラスト法 (National Trust Act) (第2次ナショナル・トラスト法) の成立を受けて、歴史的建築物の所有者がナショナル・トラストに邸宅と土地を譲渡することで、死亡税 (相続税) と邸宅に対する税を免除され、特定の日に大衆にその場所を公開することを受け入れることによって、その後も家族とともに (そして将来はその相続人たちも) 生涯不動産権者としてそこに居住し続けることを可能にする「カントリーハウス保存計画 (The Country House

Scheme)」を実行に移すことができるようになった²⁷⁾。第二次世界大戦中の接収による損害などで財政的に立ち行かなくなり、所有する地所が絶滅の危機に瀕したのであろうか、ハーティントン・パークの領主もその制度を利用したようである。

ハーティントン・パークのロッジ（大邸宅の門番小屋）で育ったニール警部は、郊外の大邸宅に「ロッジ」と命名する成金たちのわざとらしさに辟易している。

これをロッジ〔門番小屋〕と呼ぶとは、まったく！ ユーツリー・ロッジとは！ こうした金持ちのわざとらしさと言ったら！ この家は彼、ニール警部に言わせればマンション〔莊園領主用の邸宅〕だった。彼はロッジとはどういうものか経験から知っていた。彼はロッジで育ったのだから！ 29室もの寝室がある、あの巨大で不格好なパラディオ様式の邸宅で、現在はナショナル・トラストに引き渡されているハーティントン・パークの門に建てられているロッジで。そのロッジは小さく、外側から見ると魅力的だったが、内側ははじめじめていて、不快で、最も原始的な衛生設備以外何も整っていなかった。幸運なことに、ニール警部の両親はこうした事実はまったくもって妥当でふさわしいことだと受け入れていた。彼らは家賃を払う必要もなく、必要なときにだけ門の開け閉めをする以外に何ひとつする必要はなく、いつでも十分なウサギを捕まえ、ときにはキジなども手に入れて、鍋で料理することができた。ニール夫人は電気アイロン、緩慢燃焼レンジ、タオル類乾燥用戸棚、蛇口をひねるだけで出てくる冷水とお湯、単に指でスイッチを軽くはじくだけで点く照明などといった贅沢を味わうことはなかった。ニール一家は冬はオイル・ランプを使用し、夏は暗くなったら床に就いた。彼らはあらゆる点で徹底的に時代遅れではあったが、健康で幸せな家族だった。

だから、ニール警部はロッジという言葉聞いたとき、自分の子ども時代の思い出がよみがえった。しかしこの場所は、このわざとらしく命名されたユーツリー・ロッジは、まさにお金持ちが自分たちで建ててから、「自分たちの小さな田舎家」と呼ぶようなマンションだった。それに、ニール警部の考える田舎から言えば、ここは田舎でもなかった。その家は大きながっしりとした赤レンガの建築物で、上に向かってというより、縦方向に不規則に広がっており、破風は多すぎて、すさまじい数の鉛枠のガラス窓があった。いくつもあるガーデンは実に人工的で——どのガーデンにもバラの花壇とトンネル状のあずまやと小さな池が配置されていて、家の名前にふさわしく、刈り込まれた大量のユーツリー〔イチイ〕の生け垣があった。

〔・・・〕〔ニール〕警部はその〔野生の大きなイチイの〕木は新築の赤レンガの住宅群がこの田園地帯に急速に広がるよりもずっと前からそこにあったのだらうと思った。ゴルフ場が作られ、流行を追う建築家たちがあちこちの場所の利点を指さして示しながら、お金持ちの顧客たちとともにあたりを歩き回るよりも前からずっとあったのだ。（27～29頁）

おそらくハーティントン・パークに住んでいた真の上流階級の領主を間近に見ていたニール警部には、フォーテスキュー家の態度の品格のなさは目に余るものがあつたのであろう。ここでもう1つ注目すべき点は、フォーテスキュー家が移民の家系に設定されていることである。フォーテ

スキュー家は生粋のイングランド人ではなく、中央ヨーロッパからの移民で、レックスの父親がもともとの“Fontescu”という苗字を「響きがいい」(24頁)ので“Fortescue”に改名したことになる。成り上がりという階級の問題だけではなく、移民という人種の問題をも内在させることで、クリスティは変わりゆくイギリス社会を写し取っていることがうかがえる。

この作品でも第二次世界大戦後の闇市、高い死亡税（相続税）、使用人不足などの問題が語られる。特に使用人の問題は深刻で、セクション「3.1.」で取り上げた、同時代のポワロ作品『マギンティ夫人は死んだ』同様、使用人はビジネスライクになり、雇用主に忠誠心を感じていない様子が描かれる。フォーテスキュー家の家政婦メアリ・ダヴ（Mary Dove）は「『私は雇用主たちに何の忠誠心も抱いていません。私は給料の良い仕事だから彼らのために働いているだけですし、この仕事には良い給料を払っていただく必要があると主張しています』」(34頁)と公言する。また、若い世代は自由や華やかさを求め、邸宅の使用人になるよりもカフェやレストランに勤務することを好み、1か所に長く留まろうとしない。犠牲者の1人であるグラディス・マーティン（Gladys Martin）についてのミス・マーブルの語りが当時のメイド事情を物語る。

「グラディスは17歳のときに私のところにやって来て、私が彼女に給仕の仕方や銀食器の維持の仕方など、すべてのことを教えました。もちろん彼女は長くは留まりませんでした。彼女たち「最近の若い女の子たち」は皆そうです。彼女はちょっと経験を積むやいなや、出て行って、カフェでの仕事に就きました。若い女の子たちは大抵の場合そうしがります。ご存じのように、彼女たちはその方がもっと自由になれて、もっと楽しい毎日が送れるようになると思っています。多分そうなのかもしれません。本当のところ、私にはよく分かりませんが」(108頁)

そのため、使用人の雇用は売り手市場となっており——「『家事使用人の不足から、最近は手に入れたと思った場所でポストを手に入れるのは本当にとても簡単です。スタッフは常に入れ替わっていますから』」(230頁)——、成金たちは金に糸目を付けず、使用人の確保に躍起になっている。ダヴは、『パディントン発4時50分』(4.50 from Paddington, 1957年)のルーシー・アイレスバロウ（Lucy Eyelesbarrow）同様、このように使用人が減少している状況に目を付けて高額を稼いでいる——「『快適に過ごすためならいくらでもお金を払ってくれるような超富裕層のためにしか働きません』」(35頁)。ただし、ダヴはルーシーとは異なり、その状況を悪用し、犯罪に手を染めているので、2人の共通点はそこまでである。こうした状況の中、常駐の執事、家政婦、パーラーメイド、ハウスメイド、コック、そして、1950年代の他のクリスティ作品と異なり、まるで3人の庭師を雇っているかのように「手入れの行き届いた」(183頁)地所を誇る新興階級のフォーテスキュー家が、いかに潤沢な資産を所有しているかがうかがい知れる。そして、やはり『マギンティ夫人は死んだ』同様、第二次世界大戦後のイギリスを描く本作品からも、容易にアイデンティティを偽れる様子がうかがえる。

3. 4. 「グリーンショウ氏の阿房宮」(“Greenshaw’s Folly”)：ミス・マーブル作品、1956年出版、『ミス・マーブルの最後の事件簿』(*Miss Marple’s Final Cases*、1979年)収録、1950年代の設定²⁸⁾

舞台となるのは通称名グリーンショウズ・フォリー (Greenshaw’s Folly) というカントリーハウスである。これはヴィクトリア朝時代の1860年から1870年代に、当地で無一文から富裕層へと成り上がったナサニエル・グリーンショウ (Nathaniel Greenshaw) の建てた「時代物」(147頁)の芸術作品で、現在は孫にあたるミス・グリーンショウ (Katherine Dorothy Greenshaw) が住んでいる。このカントリーハウスを見た文学批評家のホレイス・バインドラー (Horace Bindler) はまさか私人が住んでいるとは思わず、今は孤児院かホテル (ホステル) として使われているのだらうと予想し、現在カントリーハウスは「高くついて無駄なもの」(157頁)でしかなく、カントリーハウスを必要としているのは映画会社かホテルか施設だけだらうと述べている。また、ミス・マーブルはこうしたカントリーハウスを運営するにはお金がかかり、ミス・グリーンショウの次に家を継ぐだらう甥 (実際はすでに死去しており、作品内では別人が甥になりすましている) は相続したらすぐに売り飛ばすだらうと予想している。このように、一般の人びとは広大なカントリーハウスを見ても、もはや貴族やジェントリーの邸宅とも、資産家の住居とも思わず、企業か団体の所有物と考えるように、意識の変化が生じていることが明らかにされている。

3. 5. 『死者のあやまち』(*Dead Man’s Folly*)：ボワロ作品、1956年出版、1954年から1956年の間の設定²⁹⁾

16世紀末からその一族が当地に住み、18世紀末に再建されたカントリーハウス、ナス・ハウス (Nasse House) の元女主人フォリアット夫人 (Amy Folliat) は、第二次世界大戦中に2人の息子を失い、死亡税 (相続税) などの税金と収入の減少で困窮し、地所を売らざるを得なくなり、現在、敷地内の近代化されたロッジ (門番小屋) を借りて住んでいる。ナス・ハウスは第二次世界大戦中は陸軍に「接收され」(48頁)、その後ゲストハウスか学校に改造される可能性が高かったが、ユースホステルに改造されてしまった、ナス・ハウスの隣の地所フーダウン・パーク (Hoodown Park) とは異なり、資産家のサー・ジョージ・スタップス (Sir George Stubbs) によって個人の私邸として購入され、潤沢な資金が投入され、美しいカントリーハウスとしてよみがえる。当地の地方議員の妻はこうしたナス・ハウスの幸運について次のように感想を述べている。

「ナス・ハウスにまた人が住むようになってよかったです。誰もがホテルになるのではないかと大層心配していました。最近の状況をご存じでしょう。田園を車で走ると、『ゲストハウス』とか、『プライベート・ホテル』とか、『ホテルA. A. 全ライセンス取得済み』といった看板が掲げられている場所を次々と通りすぎます。どこもすべて私たちがかつて少女だったころに滞在した家——あるいは、ダンスをしに行った家です。とても悲しいことです。ええ、ナス・ハウスのことはうれしく思いますし、気の毒なエイミー・フォリアットももちろん喜んでいると思います」(62頁)

フォリアット夫人からナス・ハウスを購入し、カントリーハウスの当主となったサー・ジョージ——実は第二次世界大戦中に亡くなったことになっているフォリアット夫人の次男ジェイムズ (James Folliat) で、一代で財をなした実力者ではなく、妻の財産を横取りしたにすぎない——は、本来、「ノブレス・オブリージュ (noblesse oblige)」の精神に基づき、カントリーハウスの運営にかかわる多くの使用人たちに心を配らなければならない立場にいるのに、自らの地所のテナントで、その家族の多くがフォリアット家に仕えてきたマーデル (Merdell) 家——老マーデル (Old Merdell) はかつて先代のフォリアット氏のボートを管理し、その長男のマーデル氏 (Mr. Merdell) は30年間ナス・ハウスの庭師の棟梁を務め、末娘 (Mrs. Tucker) は若いころにナス・ハウスの使用人を務めていた経験がある——の人びと——老マーデルとその孫娘 (であり、マーデル氏の姪である) マーリーン・タッカー (Marlene Tucker) ——を何のためらいもなく殺してしまう。「アガサ・クリスティの田園 (1)」のセクション「3. 1.」で論じたように、すでに1930年出版の『牧師館の殺人』(*The Murder at the Vicarage*) で使用人のレベルの低下が雇い主の苦悩の種となっていたが、『死者のあやまち』ではこのように、雇われる側の使用人だけでなく、雇う側の領主のレベルも落ちていることが示されている。サー・ジョージが本当に成金だったのなら、クリスティによる資本主義批判が建築家マイケル・ウェイマン (Michael Weyman) による成金批判に形を変えて明らかになっていると考えることもできるのだが、サー・ジョージは実は300年近く続いてきた由緒あるフォリアット家の末裔なので、ここには支配者階級の側の劣化が示されていることが明らかになる。さらにサー・ジョージは3人もの人間を殺しているため、死刑は免れないので、フォリアット家の歴史はそこで幕を閉じることになっている以上、ナス・ハウスの運命もその後大きく変わっていき、ウェイマンが嘆くように、芸術や自然美など微塵も理解できない成金の手に渡っていくのか、フーダウン・パークのように他の施設へと姿を変えていくのであろうことが推測できる。

ナス・ハウスのモデルとなったのは、クリスティの購入したカントリーハウス、グリーンウェイ・ハウス (Greenway House) であると言われている。クリスティの伝記を著したローラ・トンプソン (Laura Thompson) は、古き良きカントリーハウスにとっては新参者であったクリスティは、グリーンウェイ・ハウスのようなカントリーハウスを買える自らの財力、実力にプライドを抱いていた一方で、自分が真の上流階級に所属しているように感じることはできなかったと分析している (331～332頁) ——「子どものころ、アガサは『レディ』になりたいと心から切望していて、今、ある意味で彼女は『レディ』になった。[...] 今、彼女はグリーンウェイ・ハウスの女主人であった。しかし、彼女の思い描く貴族とは何か違っていた——それは努力して身につけることも、努力して獲得することも、そして学ぶこともできないものだった」(332頁)。トンプソンの分析を有効と見なせば、おそらくクリスティの抱くこの複雑な感情が、『死者のあやまち』における、形骸化したカントリーハウスとその伝統的な正当な持ち主への批判と同時に、セクション「3. 3.」で取り上げた『ポケットにライ麦を』や、次のセクション「3. 6.」で取り上げる『パディントン発4時50分』における、古き良きカントリーハウスにとっての新参者である新興階級への批判という双方からの視点をクリスティに持たせた理由なのかもしれない。

なお、イギリスのカントリーハウスの存続のためには西インド諸島のサトウキビ農場で財をなした家系の娘で、知的障害者であるハティ (Hattie Stubbs) の財産が必要とされている点は、

ポストコロニアル批評を持ち込むと意味深長である。

3. 6. 『パディントン発 4 時 50 分』(4.50 from Paddington) : ミス・マーブル作品、1957 年出版、1957 年設定³⁰⁾

この作品の舞台となる「カントリーハウス」(36頁)、ラザーフォード・ホール(Rutherford Hall)は、1884年に菓子業者クラッケンソーブ(Josiah Crakenthorpe)によって建てられた大邸宅で、ここを初めて訪れたルーシー・アイレスバロウはラザーフォード・ホールをウィンザー城の小型版に譬えている。その広大な地所内には「飛行機が容易に着陸できる」(236頁)と描写されるほど広々としたパークがあり、そのパークランド(田舎の大邸宅の周囲の緑地)には牛が草を食む牧草地がある。さらに、この広大な地所内にはロッジ(門番小屋)、家庭菜園、ボイラー room 付きの温室、元厩舎のガレージ、庭師の住むコテージ(田舎家)、豚小屋、馬具小屋、作業場、離れ屋、納屋なども存在しているが、第二次世界大戦中に損害を受けたのか、こうした場所の多くは高い税や使用人不足もあって、まったく手入れが行き届いていない。かつてここには執事や従僕やキッチンメイド、さらには外国人の使用人もいたが、現在、住み込みの使用人は不在で、2人の通いの使用人が来るだけとなっている。ちなみに、使用人だけでなく、労働人口そのものが不足しており、駅では荷物を運んでくれるポーターの数まで激減している様子が描かれる³¹⁾。

ここ20年の間にラザーフォード・ホールの周辺は宅地開発が進んでいる。地所の約半分を取り囲むように敷設された線路の向こうには工場が立ち並び、その先には住宅街が広がる。「郊外」(36頁)に位置するこの土地を産業用や住宅開発用に欲しがっている開発業者も多く、彼らに売れば高額になることが随所で語られる。また、老人ホームや学校、福祉センターに利用される可能性も示唆されている。なお、同様の変化はセント・メアリ・ミード村の周辺でも生じているようで、セント・メアリ・ミード村の近くには飛行場が建設され³²⁾、ミス・マーブルの温室の2枚のガラス窓が割れたエピソードが紹介されている。

オクスフォード大学出身の才女であるルーシーは、このように(特に有能な)使用人が減少しているうえに、使用人が1か所に長く勤めることがなくなってしまったことに多くの雇用主が悩まされている状況——「まさにそうした言葉[「ちょっとお話ししたいことがあるのですが、よろしいですか?」]で、役に立つ家事使用人は直ちに離職したいと宣言するのだ」(65頁)——に目を付けて、高額を稼いでいるスーパー家政婦である。かつて、肺炎にかかったミス・マーブルのために甥のレイモンド・ウエスト(Raymond West)がルーシーを雇ったことで彼女と知り合いになったミス・マーブルは、事件解決のために彼女を雇うことになる。実はこの設定は、謎解きという物語の展開上の苦肉の策ではなく、時代を反映したものである。ルーシー・デラップ(Lucy Delap)は1961年のある調査結果——「使用人の存在が至極当然だった家庭で育った女性たちは、自分たちが結婚したとき、自分たちには家事の援助が何もないことに気が付くことになる。モダンなフラットや家、そして省力化を図る設備があっても、常に『使用人』がいることに慣れ親しんできた人びとは、彼らなしでやっていきたいとは望んでいない」(130頁)——を紹介しながら、「第二次世界大戦の間とそのあと、若い女性たちにとって、自分独りで何とかやっていく生活への移行はいまだにトラウマを与え、まごつかせるもの」(130頁)であり、「職業を持つ女性たちは、

非現実的だと悟っていたかもしれないが、家事使用人がいてくれたらいいのにと、いまだに途方もない夢を抱いていた」(133頁)と当時の様子を説明する。そうした状況の中、ルーシー・レスブリッジ (Lucy Lethbridge) によると、第二次世界大戦後、「多くの中産階級の女性たちが家事使用人の不足に乗じて、冒険心から、自ら雇用市場に参入した」(283頁) という——「〔1921年に設立された女性用の職業案内所である〕『ユニバーサル・アunts (Universal Aunts)』の努力のおかげもあって、『レディ・ヘルプ (女主人付き使用人)』はもはや滑稽化されて描かれる、寂しく、貧しいコンパニオンではなくなり、旅行をして、少しばかり世間を知る機会を求めている、エネルギーに満ち溢れた、高い教育を受けたタイプの女性たちであった」(283頁)。ルーシーも、時代の趨勢を見極めた、当時の才気あふれる女性の1人として登場しているのである。

結び

以上、本論文では第二次世界大戦中となる1940年代前半から1950年代後半までを舞台にしたクリスティ作品を扱った。次回の論文では1960年代前半からクリスティが生きた最後の年代、1970年代までを舞台にしたクリスティ作品を扱い、引き続き、彼女の作品に描かれた田園風景の変化の様子を年代順にまとめていく予定である。

注

- 1) 田園風景の移り変わりを分析する本論文では詳しく取り上げないが、『無実はいない』(*Ordeal by Innocence*, 1958年)は物語の現在は出版年と同じ1958年で(第2章で1940年が18年ほど前と述べられており、ジョン・カラン (John Curran) の編集した『アガサ・クリスティの秘密ノート』(*Agatha Christie's Complete Secret Notebooks*)によると、1940年に5歳だった登場人物が物語の現在、23歳になっていると記されている(562頁))、その2年ほど前に起きた事件を扱っているものの、第二次世界大戦中の田園地方における子どもの疎開や、戦争が家族、特に子どもに与える影響が描かれている。
- 2) マーク・アルドリッジ (Mark Aldridge) によると、原稿は1940年に書かれ(459頁)、1941年3月10日までにエージェントに届けられていたという(170, 464頁)。ちなみにカランによると、『カーテン』の原稿の表紙には、クリスティがアメリカ海軍に接収されて1942年10月に引き渡したグリーンウェイ・ハウス (Greenway House) の住所が記されているという(685頁)。また、カランは、タイプで打った初稿には大きな削除やアップデートがされていないことから、大きな加筆訂正はなかったと結論付けているが(686頁)、ジェームズ・ゼンボイ (James Zembo) は、『カーテン』は1960年代や1970年代に改訂されたのではないかと主張している。なぜなら、第11章に安楽死の話が出てくるのだが、「安楽死」という表現は1940年代にもあったものの、流行語となるのは1970年代初頭であるためである(407頁)。
- 3) それ以外の時間標記に従うと、「アガサ・クリスティの田園(1)」の注9に記したように、1924年1月に結婚してアルゼンチンに移住したヘイスティングズ (Arthur Hastings) の娘ジュディス (Judith Hastings) が今21歳だと言うので、おそらく彼の4人の子どもの中で最年少と思われる彼女が仮に最年長だとしても、物語の現在は最も早くても1946年前後で、『カーテン』の舞台設定は第二次世界大戦後となる。
- 4) ハウキンズはさらに、死亡税(相続税)の増加の影響を最も強く受けたのがカントリーハウスで、ピーター・マンドラー (Peter Mandler) (326頁)を引用しながら、戦時中に失われたカントリーハウスは28軒のみであったが、1945年から1950年の間には78軒が、続く5年間にはさらに204軒ものカントリーハウスが取り壊されたことを紹介している(146頁)。
- 5) 「アガサ・クリスティの田園(1)」の注15でも紹介したように、ヘザー・クレメンソン (Heather Clemenson) が第9章「カントリーハウスの生き残り」と適応」のセクション「所有者の変遷の年表」

で、カントリーハウスの所有者が個人から団体へどのように変わっていったかを分かりやすくまとめている。

- 6) ジェリーに家を貸すことになったミス・バートン (Emily Barton) が、彼の飛行中の事故について、「あしたの若者たちはなんて勇敢なんでしょう」(4頁)と感謝の念を述べていることから、彼は軍のパイロットとして兵役中に負傷したと思われる。
- 7) ただし、『スリーピング・マードー』に『牧師館の殺人』(*The Murder at the Vicarage*, 1930年)とこの『動く指』への言及があることから、「アガサ・クリスティの田園(1)」の注38で述べたように、『スリーピング・マードー』が1938年の設定ならば、『動く指』の設定は1941年ではなく、もう少し早い年代である1930年代中葉と見なさねばならなくなる。しかし『スリーピング・マードー』に『動く指』への言及があるのは、「アガサ・クリスティの田園(1)」の注37で述べたように、クリスティが1940年に『スリーピング・マードー』を書き上げたあとも加筆修正を続けたためであろう。
- 8) キャナダインによると、総力戦を行うのにかかる費用を賄うために、税は「それまで想像したこともないようなレベル」(630頁)に達したという。1939年11月の最初の軍事予算を賄うために、所得税は1ポンドにつき5シリング6ペンスから7シリング6ペンスに値上がりし、1941年の予算は19シリング6ペンスという最高額につり上がった。それは第一次世界大戦時の2倍の額であったそうである(630頁)。
- 9) 『カーテン』にも、第二次世界大戦が投資に悪影響を与えたため、ボワロが困窮しているのではないかとヘイスティングズが心配する場面がある。
- 10) 序章に、前半が1944年の秋の設定で、後半(以降)が1946年の晩春の設定であることが明記されている。
- 11) 物語の導入部で殺される87歳の被害者が1884年に24歳であったというので、物語の現在は1947年となる。
- 12) 「ミス・マーブルの履歴書(1)」のセクション「1.5.」で述べたように、史実に基づくと、冒頭の新聞記事から、『予告殺人』の事件は国連(安全保障理事会)で決議がなされた1948年10月29日金曜日に起こっていると推察される。登場人物の1人がある夫婦のもとを去ってから、数年後となる1937年か1938年に夫の方が亡くなり、妻の方とは12年ほど会っていないという描写と、1922年生まれの人物が25歳から26歳になっているという描写も1948年設定を裏付ける。
- 13) 例えば『ボワロのクリスマス』(*Hercule Poirot's Christmas*, 1938年)に、スペイン内乱(1936年7月～1939年4月)の空爆で命を落とした女性のパスポートを用いて彼女になりすましてイギリスにやって来る人物が登場する。『ボワロのクリスマス』はスペイン内乱中のクリスマスの設定であるため、1936年から1938年の間の12月の設定と思われる。
- 14) こうした乱用の原因は、第二次世界大戦のころはまだ建物の建築的、そして歴史的価値を考慮に入れるという概念がなかったことにあることを指摘するロビンソンは、『戦時のカントリーハウス』で、「もしも軍隊や疎開者たちに占有されている間に歴史的なインテリアを守らせる総合的な政策があったなら、多くの損害は免れていたかもしれない」(16頁)と述べ、皮肉なことに、こうした第二次世界大戦時のカントリーハウスの破壊が歴史的建造物保護の必要性を促進することになったと説明している(15頁)。
- 15) ただしロビンソンは、「第二次世界大戦後、非常に多くのカントリーハウスが放棄され、破壊された」ものの、「大多数は復元され、よみがえった」(『戦時のカントリーハウス』172頁)ことも説明している。所有者たちの中には、接収により損害を被ったことで、カントリーハウス運営方法をほぼゼロから考え直し、以前なら考えられなかったような方法で、変化していく環境に適應させていき、「経費のかかる時代遅れの白物」であったカントリーハウスを、「利潤を生むビジネス」に生まれ変わらせた人びともいたという(『戦時のカントリーハウス』17～18頁)。こうした所有者たちの努力により、第二次世界大戦を生き延びたカントリーハウスの大多数は40年後には無事にもとの状態に戻り、「早くは1960年に、イヴリン・ウォー (Evelyn Waugh) が[1945年に出版された]『ブライズヘッドふたたび』(*Brideshead Revisited*)は時期尚早の墓碑銘、空っぽの棺桶への賛辞だったと認めた」(『戦時のカントリーハウス』173頁)ことをロビンソンは紹介している。1960年の『ブライズヘッドふたたび』の再版に載っている1959年に執筆されたウォーの「序文」には

1944年〔ウォーが『ブライズヘッドふたたび』の執筆を終えた年〕の春に現在のイングリッシュ・カントリーハウス熱を予見することは不可能だった。あのころは、私たちの国の主要な芸術上

の業績である、先祖代々の田園の貴族の広大な邸宅は、16世紀の修道院のように、朽ち果て、略奪される運命にあるように思われた。だから私もかなり大げさに、しかし偽りなく真剣にそう綴ったのだ。今日ブライツヘッドが存在したとしたら、旅行者に公開され、財宝は専門家の手によって配列し直され、建物はマーチメイン卿 (Lord Marchmain) によるものよりもうまく維持されていることだろう。[...] それゆえに、この本の大部分は空っぽの棺桶に向かって説かれる賛辞である。しかしこの物語を完全に台無しにしてしまうことなしにアップデートすることは不可能だろう。この本を、見たところこの本が扱っているように思われる〔19〕20年代、〔19〕30年代ではなく、第二次世界大戦の思い出として、若い世代の読者たちに捧げたい。(8頁)

と記されている。

- 16) ロビンソンはさらに『戦時のカントリーハウス』で、「ドイツ軍の空爆によってより、イギリスや連合軍の占有者によって破壊されたカントリーハウスの方がはるかに多かった。軍人こそが歴史的に重要な壊れやすい建築物にとって最悪の占有者であることに多くの人が同意していた」(159頁)と述べている。
- 17) ロビンソンは『戦時のカントリーハウス』でも同じ数字を示しているが(169頁)、キャナダインによると、1945年から1955年の間に400軒のカントリーハウスが取り壊され、これはイギリス近代史において最も多い数であり、5日に1軒の割合でカントリーハウスが消滅した計算になるという(644頁)。
 実は数字は研究書によって誤差があり、例えば注4で紹介したように、マンドラーは、第二次世界大戦中に失われたカントリーハウスは28軒のみであったが、1945年から1950年の間には78軒が、続く5年間にはさらに204軒ものカントリーハウスが取り壊されたことを紹介している(326頁)。マンドラーによれば、1950年代初頭から中葉までが20世紀で最も多くのカントリーハウスが取り壊された時期となる(359頁)。また、ティニスウッドは、イングランドだけでも1950年代に400軒以上のカントリーハウスが、そして1960年代にはさらに300軒近くのカントリーハウスが取り壊され、それらは20世紀前半の損失の合計数に等しいものであったと、そして、1955年は48軒もの、つまりほぼ1週間に1軒のカントリーハウスが取り壊されたと述べている(『野望』44, 83頁)。
- 18) ティニスウッドによると、1947年にデブレット社 (Debrett's) は『デブレット貴族・准男爵名鑑』(Peerage and Baronetage) に載っている家族の中で、第二次世界大戦に戦死した人と、戦闘中の怪我もとで亡くなった人の名前をリスト化して出版したが、そこには1,400名以上の名前が載せられていたという(『野望』26頁)。
- 19) ティニスウッドによると、1950年に発表された大蔵省の「重要な歴史的、あるいは建築的価値のある家屋に関する委員会報告書 (The Report of the Committee on Houses of Outstanding Historic or Architectural Interest)」は、カントリーハウスの直面する死活問題の原因を課税に見出し、その他の問題点として、使用人となる人材の欠如と費用やカントリーハウスの修復と維持にかかる費用を挙げている(『野望』39~40頁)。なお、第二次世界大戦後の死亡税(相続税)と所得税についてはセクション「1. 1.」と「1. 2.」を参照されたい。
- 20) キャナダインによると、第二次世界大戦中、「貴族とジェントリーは人命や家屋を失うだけでなく、使用人をも失い、さらなる困難を余儀なくされた。1939年には100万人を越える使用人が雇用されていたが、兵役に駆り出されるか、もっと重要な仕事に異動させられるか、どちらかの理由で、2年の間に全員が姿を消した」(629頁)という。
- 21) 1948年に設立された国民保健サービスへの言及があることから、物語の現在は1948年から作品の出版年となる1952年の間のどこかの設定であると思われる。1946年設定の『満潮に乗って』で事件を担当したスペンス警視 (Superintendent Bert Spence) がボワロを再訪した際に、1946年当時を振り返って「随分前のこと」(5頁)と言っていることを鑑みると、作品出版年ごろの設定と見なすのが適当かもしれない。
- 22) 1930年代に室内担当の27名の使用人を雇っていた当主が、1958年の調査時には、27名雇っていたときと同じ値段で9名の使用人しか雇えなくなっており、使用人の経費が3倍になっていたことを報告する記事を、ティニスウッドが紹介している(『野望』335頁)。
- 23) ちなみに、エピソードでは、スペンス警視を悩ませていたこうした容疑者たちの「正体」が明らかにされる。例えば、レンデル医師はゴシップのとおり、最初の妻を殺したのであることがほのめかされ、イヴ・カーペンターは戦争未亡人などではなく、タクシー・ダンサー (ダンスホールなど

で時間決めの料金で客と踊る女性ダンサー)を生業にしていたことが明らかにされる。

- 24) 登場人物の1人が労働党政権(1945年～51年)のあとの保守党政権への批判をしていることから、物語の現在は1951年から、作品の出版年となる1953年までの間のどこかの設定であると思われる。
- 25) 第二次世界大戦中、そして戦後、庭師を見つけるのが難しかったこと、そしてそのために庭の手入れが行き届かない様子は『魔術の殺人』(*They Do It with Mirrors*, 1952年)や『鳩のなかの猫』(*Cat among the Pigeons*, 1959年)などの他作品にも散見する。「ミス・マーブルの履歴書(1)」のセクション「1.6.2.」で論じたように、ミス・マーブルが最後に友人キャリー・ルイズ・セロコールド(*Carrie Louise Serrocold*)に会ったのは1928年で、その後25年会っていないと述べているので、出版年と同じ1952年の設定と考えられる『魔術の殺人』では、田園の大邸宅ストーニーゲイツ(*Stonygates*)は、兵役に駆り出されたのか、他の仕事に異動させられたのかは明記されていないが、第二次世界大戦中、庭師がおらず、地所は荒れるに任せ、戦後も手入れがされないまま今日に至っている。ただし、物語の現在、手入れが行き届いていないのは、財政の問題ではなく、単にセロコールド夫妻に住居としてのストーニーゲイツに興味がないからである。また、第二次世界大戦終結間近のことを15年ほど前と述べていることから、出版年と同じ1959年ごろが設定と考えられる『鳩のなかの猫』では、田園出身の若者たちの就く職種が変化している様子が描かれているが、多くの若者は工場で働いたり、ホワイトカラー(サラリーマン)の仕事に就いたりするのが当たり前の今日、庭師を見つけることがいかに困難なのかを説明するセリフが作品中何回も登場する。
- 26) 「ミス・マーブルの履歴書(1)」のセクション「1.6.3.」で述べたように、1948年に設立された国民保健サービスへの言及がある点から、物語の現在は1948年から作品が出版された1953年の間のどこかの時点の設定であると思われる。そのうえで、成金の大邸宅の家政婦が、雇用主がお金に糸目を付けないため、「バター、卵、クリームなど、[コックの]クランプ夫人(*Mrs. Crump*)は欲しいものを何でも注文できる」(35頁)と述べていることを考慮すると、それは当家が富裕層であることを示しているだけではなく、この物語の舞台が、配給制が終了に近づいている、出版年の1953年ごろが設定であることを示していると考えられる。
- 27) ナショナル・トラストとカントリーハウスの関係についてはロビン・フェデン(*Robin Fedden*)を参照されたい。
- 28) 「ミス・マーブルの履歴書(1)」のセクション「1.6.4.」で論じたように、1860年から1870年に建てられたカントリーハウスの書斎の本が90年前に備え付けられたものだと描写されているので、1950年代が舞台設定となる。
- 29) 祭りが行われるナス・ハウス(*Nasse House*)で食料の調達に苦勞している描写がまったくないことから、物語の現在は、戦後もしばらく続いていた配給制が終了した1954年から作品の出版年となる1956年の間のどこかの設定であると思われる。ただし、語り手によると、オリヴァー夫人(*Ariadne Oliver*)がこの事件に基づいて3年後に書いた小説をボワロが読んだことになっているので、事件が起こっているのは作品の出版時と同時期と見なし、そこから3年先の未来から物語を語っていると考えのならば、物語の語り手にとっての「現在」は出版年よりも少し先となる1950年代後半と言うことも可能かもしれない。

なお、余談ではあるが、ハーバーコリンズ版に序文を寄せたクリスティの孫のマシュー・プリチャード(*Mathew Prichard*)は、オリヴァー夫人は祖母を思い出させる人物であると述べている(ix頁)。オリヴァー夫人は本作品でも様々な作家論を語っているが、第17章で、祭りの「殺人犯探し」の筋を決める際に、容疑者の1人を原子力科学者に設定した理由について、「最新の状況に合わせ」(213頁)、「近代的に」(214頁)することの重要性を挙げていることから、クリスティは常に自らのミステリー小説に「最新の情報」を入れる工夫をしていたことがうかがえる。クリスティが、オリヴァー夫人についてのボワロの指摘——『『あなたは周囲の雰囲気と、出会った人びとの性質に影響されます。そしてそれらはあなたの作品の中に活字となって現れます。あなたはそうとは意識していないのですが、でも、それらからインスピレーションを得て、あなたの才能あふれる頭脳は創造物を描き出すのです』』(216頁)——のとおりの方法で創作活動をしているのなら、クリスティ作品に彼女の生きた時代を読み取ろうという本論文の試みは有意義なものになると考える。

- 30) 「ミス・マーブルの履歴書(1)」のセクション「1.6.5.」で論じたように、史実を参考にとすると、エリザベス女王の時代に入っていることから1952年以降の設定であることが分かり、また、ミス・マーブルが、死刑が廃止されてしまったことは残念だと述べているため、殺人法(*The Homicide Act* 1957)により、死刑の適用が限定された1957年3月以降の設定であると見なすと、クリスマスシー

ズンから始まり、その1か月後に幕を閉じるこの物語の現在は、作品が出版された1957年11月よりも少し未来の1957年の12月から1958年の1月と考えられる。また、登場人物の年齢から計算しても、1940年のダンケルクの戦いの直前に母親の胎内にいた子どもがもし無事に生まれていたら、現在15歳か16歳になっているはずだということで、物語の現在は1955年から1957年の間ということになる。ちなみにカランは、この物語は「1956年12月20日に始まる」(550頁)と断言している。

- 31) 同様の描写は『魔術の殺人』にも登場する。
- 32) この飛行場は『バートラム・ホテル』(*At Bertram's Hotel*, 1965年)では第二次世界大戦中に軍用飛行場として使用されていたことが明らかになる。そのためピーター・キーティング(Peter Keating)は、この飛行場は1936年に初の定期便が発着し、第二次世界大戦中はイギリス空軍に徴用されていたロンドン・ガトウィック空港であると推理している(233頁)。

引用文献

- Aldridge, Mark. *Agatha Christie's Poirot: The Greatest Detective in the World*. HarperCollins, 2020.
- Aslet, Clive. *The Story of the Country House*. Yale UP, 2021.
- Cannadine, David. *The Decline and Fall of the British Aristocracy*. 1990. Vintage Books, 1999.
- Christie, Agatha. *After the Funeral*. 1953. HarperCollins, 2014.
- . *At Bertram's Hotel*. 1965. HarperCollins, 2016.
- . *Cat Among the Pigeons*. 1959. HarperCollins, 2014.
- . *Crooked House*. 1949. HarperCollins, 2017.
- . *Curtain: Poirot's Last Case*. 1975. HarperCollins, 2013.
- . *Dead Man's Folly*. 1956. HarperCollins, 2014.
- . *4.50 from Paddington*. 1957. HarperCollins, 2016.
- . "Greenshaw's Folly." 1956. *Miss Marple's Final Cases*. 1979. HarperCollins, 2016. 147-178.
- . *Hercule Poirot's Christmas*. 1938. Berkley Books, 2000.
- . *Miss Marple's Final Cases*. 1979. HarperCollins, 2016.
- . *The Moving Finger*. 1943. HarperCollins, 2016.
- . *Mrs. McGinty's Dead*. 1952. HarperCollins, 2014.
- . *The Murder at the Vicarage*. 1930. HarperCollins, 2016.
- . *A Murder Is Announced*. 1950. HarperCollins, 2016.
- . *Murder Is Easy*. 1938. HarperCollins, 2017.
- . *The Mysterious Affair at Styles*. 1921. HarperCollins, 2013.
- . *A Pocket Full of Rye*. 1953. HarperCollins, 2016.
- . *Ordeal by Innocence*. 1958. HarperCollins, 2017.
- . *Postern of Fate*. 1973. HarperCollins, 2015.
- . *Sad Cypress*. 1940. HarperCollins, 2015.
- . *Sleeping Murder*. 1976. HarperCollins, 2016.
- . *Taken at the Flood*. 1948. HarperCollins, 2015.
- . *They Do It with Mirrors*. 1952. HarperCollins, 2016.
- Clemenson, Heather A. *English Country Houses and Landed Estates*. 1982. Croom Helm, 1985.
- Curran, John. *Agatha Christie's Complete Secret Notebooks: Stories and Secrets of Murder in the Making*. Fully revised and updated ed., HarperCollins, 2020.
- Delap, Lucy. *Knowing Their Place: Domestic Service in Twentieth-Century Britain*. 2011. Oxford UP, 2014.
- Fedden, Robin. *The National Trust: Past and Present*. 1968. Jonathan Cape, 1974.
- Howkins, Alun. *The Death of Rural England: A Social History of the Countryside since 1900*. Routledge, 2003.
- Keating, Peter. *Agatha Christie and Shrewd Miss Marple*. Priskus Books, 2017.
- Lethbridge, Lucy. *Servants: A Downstairs View of Twentieth-century Britain*. Bloomsbury, 2013.
- Mandler, Peter. *The Fall and Rise of the Stately Home*. Yale UP, 1997.
- Prichard, Mathew. Introduction. *Dead Man's Folly*, by Agatha Christie, HarperCollins, 2014. vii-xii.
- Robinson, John Martin. *The Country House at War*. The Bodley Head, 1989.

- . *Requisitioned: The British Country House in the Second World War*. Aurum Press, 2014.
- 坂田薫子「アガサ・クリスティの田園——アガサ・クリスティ作品から読み解く20世紀イギリスの田園の変遷（1）1910年代から1930年代まで」（『紀要 文学部』73号、2023年、41～66頁）
- . 「「透明な批評」で読むアガサ・クリスティ——ミス・マーブルの履歴書（1）年齢」（『英米文学研究』57号、2022年、21～52頁）
- Seebohm, Caroline. *The Country House: A Wartime History, 1939-45*. Weidenfeld and Nicolson, 1989.
- Stone, Lawrence, and Jeanne C. Fawtier Stone. *An Open Elite? England 1540-1880*. Oxford UP, 1984.
- Thompson, Laura. *Agatha Christie: A Mysterious Life*. 2007. Headline, 2020.
- Tinniswood, Adrian. *The Long Weekend: Life in the English Country House, 1918-1939*. Basic Books, 2016.
- . *Noble Ambitions: The Fall and Rise of the English Country House after World War II*. Basic Books, 2021.
- Turner, E.S. *What the Butler Saw: Two Hundred and Fifty Years of the Servant Problem*. 1962. Penguin Books, 2001.
- Waugh, Evelyn. Preface. *Brideshead Revisited: The Sacred and Profane Memories of Captain Charles Ryder*, by Evelyn Waugh, Rev. ed., 1960. Penguin, 1986. 7-8.
- Zembo, James. *The Detective Novels of Agatha Christie: A Reader's Guide*. McFarland and Company, 2008.